

審査の結果の要旨

氏名 高木二郎

本研究は、慢性腎不全にて維持血液透析中の患者における身体的因子と心理的因子の関係(心身相関)について、大規模な調査を行ったものであり、restless legs syndrome とコンプライアンスについて、下記の結果を得ている。

1. Restless legs syndrome (RLS) の患者と、RLS でない患者を比較したところ、単変量解析にて、人口統計的因子(年齢、性別、透析施設、喫煙)については、有意な差を認めなかった。臨床的、及び心理的因子については、血清リン値、Hospital Anxiety and Depression Scale (HADS) の不安の値、Coping Inventory for Stressful Situations (CISS) の感情志向と回避志向の値に有意な差を認めた。透析期間、透析量、週の透析回数、炭酸カルシウム、ビタミン D、ベンゾジアゼピン系薬剤、抗うつ剤などの服薬内容については、有意な差を認めなかった。多変量ロジスティック回帰分析にて、独立に、高い血清リン値、短い透析期間、高い CISS の感情志向の値、低いヘモグロビン値、高い HADS の不安の値が、RLS の存在と有意な関係をもつことを認めた。

2. 血液透析患者の生理的なコンプライアンスの指標として使われてきた血清中の血中尿素窒素 (BUN)、カリウム、リンの値、interdialytic weight gain (IDWG)が、どの程度心理的なコンプライアンス指標と関係するかを検討し、その結果に基づいて生理的コンプライアンス指標の有用性を評価した。Pearson と Spearman の相関係数双方において、血清カリウム値と IDWG はセルフエフィカシー第 1 因子と負の有意な相関を示した。血清リン値は、Spearman の相関係数で評価した場合のみ、セルフエフィカシー第 1 因子と有意な相関を示した。BUN 値は、セルフエフィカシーと有意な相関を示さなかった。回避志向ストレス対処は、いずれのコンプライアンス指標とも有意な相関を示さなかった。重回帰分析の結果、セルフエフィカシー第 1 因子は、年齢、性別、透析期間、透析施設の違い、栄養状態、薬物の効果、透析量と独立に、有意に、血清カリウム値と IDWG と関係した。セルフエフィカシー第 1 因子の寄与率は、血清カリウム値においては 2.2%、IDWG においては 4.5%であった。血清リン値は、各影響因子で補正後、セルフエフィカシー第 1 因子との有意

な関係を示さなかった。日本では、BUN 値、血清リン値よりも、血清カリウム値、IDWG のほうが、コンプライアンスの指標として有用性が高いことが示唆され、さらに、セルフエフィカシーの血清カリウム値、IDWG の分散に対する寄与率はかなり低い、有意であることから、セルフエフィカシーを高めるような介入が、維持血液透析患者のコンプライアンスを改善させ、血清カリウム値や IDWG の値を低下させる可能性が示唆された。

以上、本論文は、独立に、高リン血症、高い CISS の感情志向の値、不安が、維持血液透析患者における RLS の存在と有意な関係をもつことを、初めて明らかにした。慢性腎不全患者における RLS の存在は、有意に死亡と関係していたとの報告があり、その発症機序を調べるのは重要と思われる。本研究は、RLS の発症機序の解明に重要な貢献をなすと考えられる。

また、BUN 値、血清カリウム値、血清リン値、IDWG がコンプライアンスに関与する程度を推測することは、これらをコンプライアンスの指標として用いる上で、大変重要な問題である。今回初めて、それらのコンプライアンスへの寄与を、セルフエフィカシーとストレス対処メカニズムなどの心理的コンプライアンス指標との各影響因子補正後の関連に基づいて評価した。これらの結果は、日本における維持血液透析患者のコンプライアンスの評価や、コンプライアンスを高める介入法の開発に重要な貢献をなすと考えられる。

以上より、本論文は学位の授与に値するものと考えられる。